

保険会社に勤務するTさんは、二十八歳という若さでありながら、社内ではトップクラスの成績を上げている営業マンです。

入社した頃は、積極的なタイプではなかったのですが、ある日の通勤列車内での出来事がきっかけとなって、自分を変える努力を始めたのだといえます。

それは土曜日のことでした。平日よりも車内は空いていて、通勤客に混じって何人かの小学生がいました。

列車は、出発してから最初は順調に進行していましたが、突然「ガタン」と大きく横に揺れたのです。その時、一人の小学生の女の子が、隣にいたビジネスマンの足を踏んでしまいました。次の瞬間「あつ、ごめんなさい」と、大きな声と共に頭を下げたのです。足を踏まれた男性も、素直で誠実な姿に、笑顔になって、「大丈夫ですよ」と応じたのでした。

その光景を目にしたTさんは、へもし、あの子が何も言わず黙ったままだったら、どうなっただろう……。車内は険悪なムードが生じたかもしれない。それが、ひと言を発したことで、互いに気まずい思いをするどころか、親しさと和やかさが醸し出されたんだと感じ、日々の自己の態度を振り返りました。

その出来事の半年前から、Tさんは通勤途中のバス停で、初老の男性と毎朝すれ違っていました。挨拶をすることはなかったのですが、毎日顔を合わせる中で、知らぬ振りをしているのが心苦しく感じるようになってい



勇気ある挨拶が 豊かな人間関係を築く

絵・今谷 鉄柱

たのです。自分よりも年下の子供の姿に刺激を受け、ある朝、Tさんは思い切ってその男性へ会釈をしました。すると、その男性も笑顔でお辞儀を返してくれたのです。

その時、爽やかな気分を感じたことが弾みになって、数日後には「おはようございます」と声をかけるようになります。さらには「最近、お仕事の調子はいかがですか？」などちよつとした会話をするようにまでなっていました。

やがて、Tさんと男性は出身地や通っていた学校も同じであることが分かり、二人はますます仲良くなりました。その後、ゴルフを一緒に楽しんだり、お互いの自宅へも遊びに行くようになりました。

また、男性からお客様をたびたび紹介してもらえ、間柄にまでなっていました。営業成績がグングン上昇し始めたのは、ちょうどその頃からでした。

Tさんは「あの列車内での出来事が、自分が変わるきっかけになりました。気づきを大切にして、言葉をかけて本当に良かったと思います」と振り返ります。

言葉はコミュニケーションをより良くするために必要なものですが、私たちはそれをいつでも適切に使っているのでしょうか。豊かな人間関係を築くために、どのような相手へも思いやりを込めた言葉を、素直に使えるようになりたいものです。